

# 恩師 小尾 帛 雄

私が東京都教育長には任命されたとき、

中学生時代の友だちが集まってお祝いのよ  
うな会をしてくれたことがあった。そのと  
き、中学のクラスの担任だった河西（かき  
い）先生も同席されて、私をはげましてく  
ださったが、先生の健康がどうしてもすぐ  
れられないように思われたので、会がすん  
だ翌日、デパートへ行ってステッキを買  
いお届けした。

先生はたいへんよろこばれて「これから  
はこれをつけて、せいぜい散歩に心がけ、  
丈夫になるよ」といわれた。先生は若いこ

ろ、剣道で鍛えられたりっばな体格だっ  
たが、戦争中苦勞され、特に鬪闘いなどは絶  
えられなかつたので、戦後はひどい栄養失調  
で衰弱された。戦後まもなく奥様をなくされ  
てから、先生を取りまくさびしい影は、いよ  
よ濃くなったように、私たちには思われたの  
である。

その先生がついこのあいだなくなられて、  
大阪の令息から「あのステッキは父がたいへ  
ん愛用していたのでお棺の中に入れてあげま  
すから」と言ってこられた。ステッキを私  
がさしあげたことが、ご家族に知られていたの

は、先生がよくそのことを口にされたから  
である。

このおくりものがそんなに先生を喜ばし  
たのは、一つには先生にとって適当なおく  
りものであったこともあったであろうが、  
さらに重大なことは、それが自分の愛する  
教え子からおくられたものであったとい  
うことだったと私は思う。

さきごろ私も教育長をやめたので、退任  
をねぎらう会がほうぼうで催されたが、こ  
のあいだ私がむかし教えた学生たちの会が  
あった。私の隣にすわった主婦が「先生が  
テレビに出ると、気が気じゃない」という  
ので、ヘエーそんなものか、と思ってい  
たら、こんどは司会者が「先生がテレビに出  
ると、心配でハラハラしちゃいます」と同  
じようなことを言う。私がとちったり、み  
んなから突っこまれて、答えられなかつた  
らどうしよう、はらはらするということ  
らしい。私はこれを聞いて、先生と学生と  
の人間関係について、あらためて考えさせ  
られた。

役所にいたころの私はきびしいとか、こわいとかいのが通り相場になっていた。

いつか宴会でお酒を飲んでいたとき、ある人が「この人は笑ったことのない人だから、もし笑わしたら百円の懸賞金を上げる」と言ったのには、私自身がまずびっくりした。なかには「君は笑わないから、顔にしわが出なくていい」などとひやかすものがある。

私のぶあいそうは性格的なものだから、教師として学生を教えていたときも、やはりこわい感じの先生であつたらう。しかし学生というものは、先生のいろいろのくせを知りつつも、先生を敬い、慕うものである。それは先生が真理と正義を背負つて学生に向かい、利害をこえた愛情に結ばれた人間関係で、学生の成長を念願することを知っているからである。先生が若いものへ注ぐ愛情が純粹な美しいものであるということはいうまでもないことである。先生と学生とのこの自然の関係をこわさないではないといふのが、すべての人の願ひではな

かろうか。

話は河西健児先生の思い出にもどる。

七十三歳といえ、いまではそれほど高齢ともいえないのに、先生は枯木の倒れるようになくなられた。朝のことで家人はすべてそばにいたが、あまり静かなご最期で、だれも気づかなかつたほどである。

先生は終戦の翌年、旧制木曾中学校長の職を退かれ、郷里の諏訪へ帰られたが、そのとき先生はすでにひどく弱つておられた。闘いを絶対しなかつた先生は、栄養障害のため五十歳で、すでに老衰した年よりのような感じで、ひどく私たちを心配させた。戦後の生活はきびしく、昭和二十七年に奥さまをなくされたときは、そのさびしい影が、ますます濃く先生をつつんでいたように私たちには感ぜられた。だが昭和二十八年、お子さまがたのあとを追われて上京、都立高校の教壇に立つて、週二十数時間も働かれるお元気をみて、私たちは目をみはつたのである。

われわれが旧制諏訪中学校で教えを受けた

ころは、先生は三十歳前後だったから、いわば生氣溢れる青年教師だったわけである。授業のおわりの鐘が鳴ってもおかまいなしで、次の先生が教室の戸口に來てからやうと教壇をおりるようなこともあつた。休み時間がつぶれるので、いたずら小僧たちは大いに不平を言つたものである。

こうした熱のこもつた授業よりは、上京後の六十歳を越えたころの先生からも、失われなかつたようである。そして、それは生徒たちに感化を与えただけでなく、勤務校の先生たちにも影響を及ぼしたと聞いている。話し好きで、教科書そっちのけにして、最近読んだ本の感想、だれかれの人物評や世相批判など、熱のこもつた先生の話しぶりは、いまも私の耳朶(じだ)をうつつおもひがある。

先生は諏訪中学の生徒だったころ、画家の中川紀元氏と首席を争つたという。先生逝去の報に接して、中川氏は「剣道できたえた河西君がさきになくなられた」と言つて暗然とされた。

中学生時代の先生は、眉目秀麗、長身颯爽の少年剣士として、はなやかな存在を誇り、級友の注視を集めていたということがある。しかし私たちが教えを受けたころの先生は、なんとなくじじむさい感じてであった。いつも和服に袴（はかま）をはいていたが、なんとなくうすぎたない感じだった。ひげなどもあまりそったことがなかったのではないかと思う。そして前かがみに考えこむように歩かれた。当時の若い中学生たちは、「愛」とか「誠」とかいう人生の内面的なものについて深く考えることを、この先生の姿勢から学んだのである。先生はそのころ、白樺派の文学運動に関心をもち、しばしばそのことに触れられた。また、トルストイと徳富蘆花の出会いなどについての情熱をこめたお話は、半世紀を隔てていままなおありありと思いうかべることができる。郷土の文学者島崎藤村については特に語られることが多かったが、同じ諏訪の歌人島木赤彦についての身近なお話はかくべつ印象ぶかかった。

奥さまがおなくなりになったとき、柩（ひつぎ）を前にして先生はこう語られた。

「私は妻に対してなにもしてあげられなかったが、妻に対して不貞の事実のなかったことがせめてものなぐさめである」

先生は純粹で理想家肌のロマンチストで、デリケートな心の持ち主だったから、ふつうの人にはなんでもないようなことにも、苦しまれ悩まれたようである。それだけに人の心をいたわる心の深さに及びがたいものがあった。先生はなによりも愛の人であったといえよう。ましてそれが、先生を教育者として成功させたゆえんのものである。

私は無軌道なところがあり、ずいぶん先生には心配をかけた。しばしば先生のお宅へ伺って、おとなしく長い間先生のお説教をうかがっていたのは、先生の愛に甘えていたのだと当時を回想する。すべての欠点を埋め、すべての歪曲（わいぎよく）すら正すものは愛である。教育者の愛は親の愛のように強いものではないかもしれないが、それは道の上に立っている。正義への情熱が教え子の愛

の形をとると言えば言いすぎになるかもしれないが、教育愛とは道へのあこがれを背景として、教師と生徒との心のふれ合いが結晶したものである。

晩年の数年間は病がちであったが、すでに諦観の境に達せられた先生は医療をこぼれ、周囲はその説得に苦勞した。このなかで奈良方面への先生の最後の旅行は、ほんとうに先生を楽しませたらしい。自然と芸術を愛され、この方面で著述をすべく用意されていた先生には、この旅行は十分に楽しく、また得るところがあったようである。長女百合子さんにたすけられてようやく歩を運んだ、はたからみれば苦しい旅ではあったが。

×

×

×

×